

上田市文化財調査報告書9

塚穴原第1号古墳発掘調査報告書

——長野県上田市——

1976

上田市教育委員会

序にかえて

上田市下之郷の小牧山南西面山麓には東山古墳群を中心として数十基に及ぶ下之郷古墳群を形成していますが、今回発掘調査を実施した塚穴原一号古墳は、その東山古墳群の西端に位置する円墳であります。

最近でこそ郷土史の研究がすすみ、文化財に対する関心が高まり、古墳などの埋蔵文化財にも一般に理解が深まりつつありますが、かつては多くの古墳が犬井石や側壁石が抜かれたり、歴史的な遺物が盗掘に遭うなどの被害を被ったり、学術的にも価値の高い文化遺産が活用されないまま埋没してゆきましたが、塚穴原一号古墳もこの例にもれず、外観から推察してこのままに放置しておきますと、崩壊は必至の運命にありました。

また一方では、この塚穴原一号古墳の南西約40メートルの地点には昭和47年度に発掘調査が実施され、多くの出土遺物とともに塩田平の古墳群築造に大きな手がかりを提供した他田塚古墳が厳然と存在し、この他田塚古墳との関連からも学術的な解明に迫られておりました。

そこで上田市教育委員会では緊急発掘調査を実施することになり、まだ春浅い三月にその実施時期を定めたのであります。

調査は上田市文化財調査委員長である遠藤憲三先生を団長に、米山一政先生、堀入秀敏先生、川上学芸員方を調査員にお願いし、作業のお手伝いを上田女子短大、下之郷自治会の皆さんにお願いいたしました。各調査員の先生方のご尽力は申すまでもなく、埋蔵文化財の宝庫を抱える下之郷自治会の皆さんの総力あげての熱意あふれるお力添えによって極めて多くの成果をあげて終了することが出来ましたことは、将来に亘る大きな基盤となるものでありまして、ここに甚深な敬意と謝意を表する次第であります。

この調査により、また郷土の歴史が刻一刻とその全貌を私たちの前に現わす日が近づいたという喜びと同時にこの結果を末長く後世に伝える重責を痛感するものであります。

遺産として広く社会の人々に活用されることが今後の課題でありまして、歴史の激しい変遷の中で山ふところの静寂さを背景にひそかな面影を保って来たこの古墳を愛護し、文化の芽を更に大きな樹に育てるべく努力を続けてゆきたい考えであります。広く今後のご協力を念じる次第であります。

1976年3月

上田市教育長 山 極 真 平

例 言

- 本書は上田市大字下之郷字塚穴原812-54 所在の塚穴原第1号古墳の発掘調査、および発掘遺物に関する報告書である。
- この調査は上田市教育委員会が主体となり、事業の実施を上田市文化財調査委員会へ委託して昭和50年2月24日から同年3月23日まで行なった。
- 出土遺物の整理は塩入秀敏調査員の指導のもとに上田女子短期大学歴史研究会で行った。
- 調査時ならびに遺物の写真撮影は主に川上元氏と事務局で行った。
- 執筆は次の通り行なった。

第一章 調査に至る経過	事務局
第二章 自然環境と社会環境	川上元
第三章 墳丘と石室の規模	米山一政
第四章 出土遺物	
第一節 遺物の出土状況	塩入秀敏
第二節 遺物	
1. 装身具類	塩入秀敏
2. 武器及び武具類	米山一政
3. 土器類 A	川上元
◇ B	塩入秀敏
4. 人骨	塩入秀敏
第五章 まとめ	米山一政
あとがき	事務局

- 今回の調査については地元下之郷自治会の皆さんの熱意あるご協力をいただいた。特に永井鎮雄氏、南波常樹氏、伊藤常雄氏、宮入利彦氏の四氏におかれては終始、強力なるご助力をいただいた。ここに敬意を表し、心から感謝申しあげる次第である。

目 次

序にかえて	1
例 言	2
第一章 調査の経過	4
第一節 発掘調査の経過	4
第二節 調査団の構成	5
第三節 調査日誌	5
第二章 自然環境と社会環境	9
第一節 自然環境	9
第二節 社会環境	9
第三章 墳丘と石室の規模	11
第一節 墳 丘	11
第二節 石 室	12
第四章 出 土 遺 物	19
第一節 遺物の出土状況	19
第二節 遺 物	20
1. 装身具類	20
2. 武器及び武具類	25
3. 土 器 類	33
4. 人 骨	39
第五章 ま と め	41
あとがき	45

挿 図 目 次

第1図 塚穴原第1号墳とその周辺	7
第2図 墳丘実測図	11
第3図 石室実測図	13
第4図-1 遺物出土状況図	17
第4図-2 床面敷石実測図	18
第5図 装身具(耳環・玉類)	21・22
第6図 武器(1) 刀 剣	23
第7図 武器(2) 鉄鎌・刀子	28
第8図 武器(3) 馬具(1)鞘尻・鈔・鉸具・鞍	29
第9図 馬具(2) 磯 金 具	30
第10図 馬具(3) 轡	31
第11図 土器(1) 土 師 器	33
第12図 土器(2) 須 惠 器	35
第13図 土器(3) 須 惠 器	36

図 版 目 次

図版1 墳丘	47
図版2 墳丘・石室	48
図版3 石室1	49
図版4 石室2	50
図版5 遺物出土状況	51
図版6 遺物出土状況	52
図版7 遺物出土状況	53
図版8 装 身 具	54
図版9 武 器	55
図版10 武 器	56
図版11 刀剣装具	57
図版12 馬 具	58
図版13 馬 具	59
図版14 土 師 器	60
図版15 須 惠 器	61
図版16 須 惠 器	62

第一章 調査の経過

第一節 発掘調査の経過

上田市下之郷の生島足島神社の東参道を下之郷須川線に沿って1.5 km登ると35基の古墳が標高700 m付近の山頭部にある東山古墳を最高点として山沢、山腹、山麓に点在し、これを東山古墳群と呼んでいる。

この一番すそ野に昭和47年度に発掘調査が行なわれた他田塚古墳があり、そのすぐ東南上にある塚穴原古墳は全壊したのも含めて1号から4号まで確認されており、早くから注目を集めていた。

しかしながら残存している2基も下之郷須川線支線の脇にあり、昔から人の眼にふれやすいこともあって、盗掘はもちろん、天井石の抜取りにより崩壊度は進んでいたのである。

したがって完全なる崩壊の前に発掘調査による記録保存の必要性が数年來うたえられていた。こうした状況のなかで上田市教育委員会は昭和49年度に発掘調査を実施し、学術的な究明を行うべく主体となり、調査計画を立案した。そして事業の実施を上田市文化財調査委員会に委託したのである。

文化財調査委員会ではただちに調査団を編成、団長に同委員長の遠藤憲三氏、調査主任に同委員で長野県文化財専門委員でもある米山政一氏、調査員に上田市博物館学芸員の川上元氏、上田女子短大講師の塩人秀敏氏、調査補助員に上田女子短大歴史研究会員を予定した。

この調査団の打ち合わせ会は昭和50年2月24日午後市役所で開かれ、具体的な日程や方針が確認された。

それによると調査開始は3月1日とし約2週間を予定し、内部の崩壊状況が判明しないので天井石の移動を行った後細部にわたる方針を検討すること、作業員は地元の下之郷自治会に依頼し、協力を仰ぐこと、3月1日までに墳丘上の雑木のかり払い、現況実測を完了させることなどであった。

この方針にそって2月いっぱいには墳丘の概要が明らかになった。

3月2日本格的な調査が開始されたが、予想外に落ち込んでいる天井石に労苦をしいられ、チェンブロック、クレーン車など大型機械力の出勤を余儀なくされ、かつてない大がかりな調査となっていくた。

さらに遂行してゆくと石室東壁の崩壊が確認され、ほぼ全体的に基底部へ崩れこんでいるなど当初の予想を上回る作業日程となっていくた。

ところで作業は困難ななかでも着実に成果を上げ、開始直後より数多くの遺物が見出された。また、堆積土上部はかなりの攪乱状況にあることが須恵器遺物の散乱のようすから推察された。

一方では崩壊した側壁石の下から次々と発見された直刀、人骨などにより結果に多くの期待

を抱かせたものである。

3月12日には発掘調査作業が終了し、13口からは実測を開始、続いて東側壁面をこのまま放置しておくで墳丘にまで崩壊の危険性が大きくなるという調査団の判断により石を補強した。その後調査期間中脇へ寄せておいた天井石を復元し、3月23日墳丘面の確認から約1ヶ月を要して全作業日程を終了した。

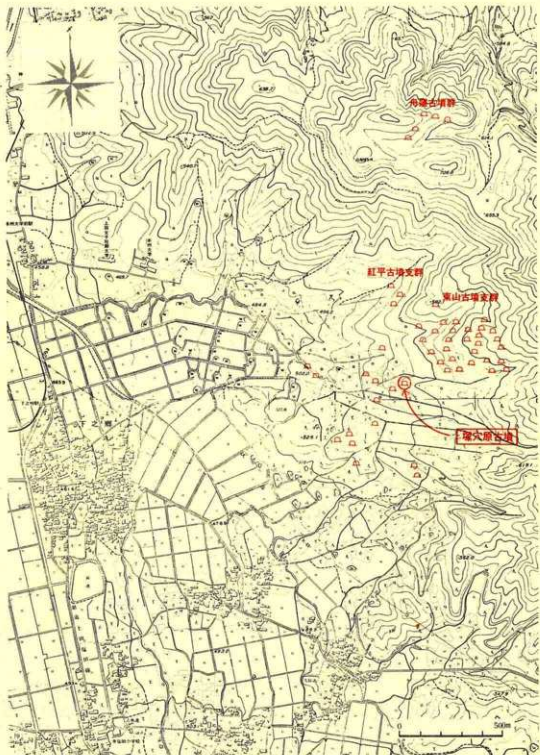
第二節 調査団の構成

調査団長	遠藤 憲三	上田市文化財調査委員長
主任調査員 (発掘担当者)	米山 一政	日本考古学協会員 長野県文化財専門委員
調査員	川上 元	日本考古学協会員 上田市立博物館学芸員
＊	塩入 秀敏	長野県考古学会員 上田女子短期大学講師
調査補助員	上田女子短期大学歴史研究会 丸山雅子・上野雪子・斉藤美代子・久保久美子・安藤千恵子・中条悦子・ 武井美代子	
調査協力者	永井鎮雄・宮入利彦・伊藤常雄・南波常樹、他下之郷自治会の皆さん	
調査事務局	上田市教育委員会社会教育課文化係 平野勝重・中村明久	

第三節 調査日誌

- 2月24日(月) 墳丘上の雑木切り払い作業
- 2月25日(火) ＊
- 2月27日(木) 墳丘の実測
- 3月1日(土) 天井石の移動
- 3月2日(日) 天井石下の土砂除去を開始、羨道部にグリットを入れる。出土遺物は天井石下20～30cmにかけて須恵器の破片が大量に発見される。
- 3月3日(月) 石室に崩れ落ちたと思われる側壁の石を引き上げる。西側壁は確認。墳丘上にトレンチを入れ墓石の確認を急ぐ。遺物は完形のマリを発見。
- 3月4日(火) 石室内床面、羨門部の土砂を排除、墳丘、周溝のトレンチで作業を継続、遺物は須恵器の水ガメ破片など。
- 3月5日(水) 奥壁面の半分ほどを確認。
東の側壁は平石を立てて裏づめをしてあると思われるのでその確認を急ぐ。

- 3月6日(木) 奥壁前の堆土除去、遺物は刀子一本発見。水ガメの口縁部など発見
- 3月7日(金) 奥壁前の堆土を排除30cmほど掘り下げる。遺物は上層面より環・小玉・馬具・直刀などを検出
- 3月8日(土) 石室内側壁上面より約100cmまで掘りさげる。葺石の実測。
- 3月9日(日) 床面上の積土、敷石面を掘り出す。遺物は鞍骨の張金・あぶみのとめ金・銅環・鉄鍔・頭がい骨などを発見
- 3月10日(月) 中軸線上の置石を除去。床面上の清掃。環・鉄鍔・直刀などが遺物として発見
- 3月11日(火) 基底面の確認、清掃
- 3月12日(水) 東壁面付着土の除去、敷石の実測。遺物は刀・小玉を検出
- 3月14日(金) 石室、葺石の実測
- 3月15日(土) 両側壁の実測
- 3月16日(日) 閉塞部石積、敷石面のレベル測定
- 3月18日(火)～23日 移動した石の復原、古墳の復元作業。23日をもってすべての作業を終了



第1図 塚穴原第1号墳とその周辺



第二章 古墳の自然環境と社会環境

第一節 自然環境

塚穴原第1号墳は、上田市下之郷の東山山麓塚穴原に所在している。下之郷は上田市街地平坦部からみると、千曲川の対岸の南方にあたる地域で、かつては塩田町に属していた集落である。しかし、昭和45年に同町が上田市と合併したため、現在では上田市域に属する集落である。

この旧塩田町一帯を地形上からみて塩田平とよんでいる。塩田平は、その南眼前に信州妙義山とさえ言われる奇岩突こつとした独鈷山(1,266m)をはじめ、富士山(1,029m)、富士岳(1,034m)などの山々がせまり、さらにその西側には大神岳(1,250m)から北東に低く張りだした川西丘陵、また東側には小牧山塊の低い山塊が張りだして、他地域との区画をなしている地域で、その面積約33.5km²を有する小平野である。平野の中央部を西南から北東へ向かって産川が流れ、その左と右側にほぼ平行して、それぞれ湯川、尾根川、駒瀬川が流れている。したがって、塩田平はこれら河川の沖積扇状地の堆積盆地であるという。さらに、この平野における気候的な特徴をあげると、年間降水量の最も少ない地域として知られている。そのために、約100にのぼる溜池が水不足を解決するために造られている。

さて、本塚穴原第1号墳は、この塩田平の東部に位置、前述した小牧山塊の南側部分にあたる東山山麓の西南面に所在している。小牧山塊は、上田市域のほぼ中央部に横たわる低い山塊で、北側は急崖をもって千曲川に接しているが、その南側部分、すなわち本古墳の立地するところでは、緩やかな傾斜をもって塩田平面に続いている。この小牧山塊は地質的には、第三紀鮮新世の青木層・小川層に属する砂岩・礫岩からなっている。

また、本古墳の立地する微地形をみると、発達した扇状地の扇頂付近にあり、標高約520mを計る地点である。この地点から西南方に開けた部分を望めば、その生産基盤たる塩田平の水田地帯が、わずかに見はるかすことができる。

なお、この塚穴原第1号墳への道は、下之郷に鎮座する古社生島足尾神社の東鳥居の前から通じている。下之郷・須川線の道路を須川に向かって、東へ約1.5kmほどのぼると本古墳に達することができる。

(参考文献) 上田小県誌自然編

第二節 社会環境

本古墳の位置する塩田平東方の東山山麓および隣接する紅平山をはじめとする一帯には、約50基近くの古墳が現在確認できる。しかし、かつてはこの一帯に70基ぐらいあったといわれ、一大古墳群を形成しており、下之郷古墳群という名称で呼ばれている。

これらの古墳は、いずれも古墳時代後期に属する小規模な円墳が、古墳群の主体をなしてい

る。今回、発掘調査を行なった塚穴原第1号墳は、その中でも最大規模を誇るもので、本古墳群の主墳的性格をもつものであるといえる。

本古墳の南約10mへだてたところに、塚穴原第2号墳の小古墳があり、さらにその南側30mほどの位置に隣接して、他田塚古墳がある。

他田塚古墳は、信濃国造他田舎人大島の古墳であるとのいい伝えをもつ古墳で、すでに開口した横穴式石室をもち、円墳の南北径18.5m、東西径17.2m、高さ約4.0mを計る。この数値は、塚穴原第1号墳よりやや小規模で、東山古墳群中2番目の規模を有するものといえる。他田塚古墳は、昭和46年上田市指定文化財候補物件としてあげられた際、石組内部の発掘調査を実施したが、内部から人骨をはじめ、副葬品としての玉類・鉄器・土器類等比較的保存状態の良好な資料が多数検出された。調査の結果、およそ7世紀初頭に築造されたものと推定されている。^(註1)

ところで、本地点より西南方に展開する塩田平には、本地点も含めておよそ100基の古墳が現存しているが、築造された古墳の大半は本古墳の立地する東山山麓一带にあることになる。

塩田平にある古墳では、まず平坦部にある新町の王子塚古墳^(註2)（前方後円墳・南北59.5m、東西34.2m、後円部高さ6m）を最大とし、今回調査の行なわれた塚穴原第1号墳（円墳）、^(註3)他田塚古墳（円墳・規模前述のとおり）、手塚の皇子塚古墳^(註4)（円墳・東西径および南北径14.8m、高さ3.3m、横穴式石室）と続くが、その他は規模が小さくなってしまふ。

ここで問題としてあげておきたいのは、塩田平における円墳で横穴式石室の構造をもつ古墳は、いずれもいわゆる「袖なし型」を有しているもので、上田盆地における特異な存在といえる。

また、塩田平の考古学的遺跡を概観すると、古くは縄文時代からの遺跡が存在し、さらに弥生式時代の遺跡数は91カ所をかぞえ、^(註5)上田盆地における、弥生遺跡の比率が特に高いところとして知られている。さらにそれに続く古墳時代から、奈良・平安時代また中世にかけての遺跡数および遺物の出土量が特に多いことがあげられる。いずれも、瀬川流域を中心とした地域およびその他の河川沿いに集中して検出されている。したがって、塩田平は原始・古代からさらに歴史時代におわたる長期間の人々の生活の痕跡が一带からみられ、とくに水稲耕作の開始時期以後の遺跡・遺物が多いといえる地域である。

註1 小林幹男『他田塚古墳発掘調査報告書』上田市教育委員会 1973

註2 滝沢 武登『王子塚』上田市指定文化財調査報告書7号 上田市教育委員会
東川多寿男

註3 註1に同じ

註4 小林幹男『皇子塚古墳発掘調査報告書』上田市教育委員会 1974

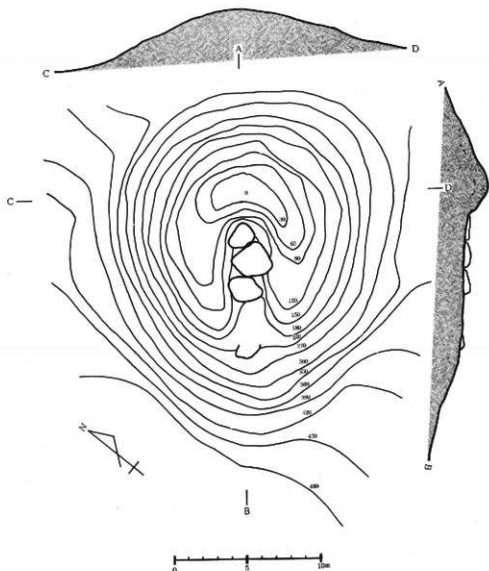
註5 小林幹男『上田市の原始・古代文化（埋蔵文化財分布調査報告書）』上田市教育委員会 1974

第三章 墳丘と石室の規模

第1節 墳 丘

墳丘は小牧山山塊の南部東山の尾根が終り、緩い傾斜を以って西方に展開する扇状地形の扇
要に築かれている。扇要ではあるが、山裾が広まり、いわば山ふところともいうべき所である。

古墳の所在する南・西・北の三方は畑地に開墾され、東方が僅かな距離を以て山に接して
いて、この一号墳及び下の二号墳を包含する地域が松樹交りの雑木林として開墾されることな



第2図 墳丘実測図

く残されていた。雑水のかなり太く高く伸びた中であって、墳丘の全形が看取れない状況にあったため、余り目立たない存在であったようである。しかし、この西南方には、道路に近く畑の中には他田塚と称する横穴式石室で既に開口した円墳があることから、この第一号墳も古墳であろうと見られていたようで、曾て盗掘を試みたものがあつた如くである。

調査着手前、墳丘の中央には南々西の方向に長さ8m余り、幅3m余りが窪地になり、天井石と考えられた大磐石が窪地の東端から南々西の方向に三枚並んであらわに露出していて、やや距離を置いて窪地の西端に一枚やや傾いた状態にあつた。墳丘には東の山側及び北側は余り変形したところがないように見えたが、南側がやや傾斜が緩やかになり、西方の谷側は殊に傾斜が緩やかになっていて、この部分は盗掘を行った際、天井石を引き下すために削り去られたようで、変容していた。

調査は先ず、墳丘及びその周縁の立木を伐採し、墳丘及び周縁をあらわにし、調査作業を充分に行い得る状態にすることから始めた。この作業は地元の協力者が主になって行われた。

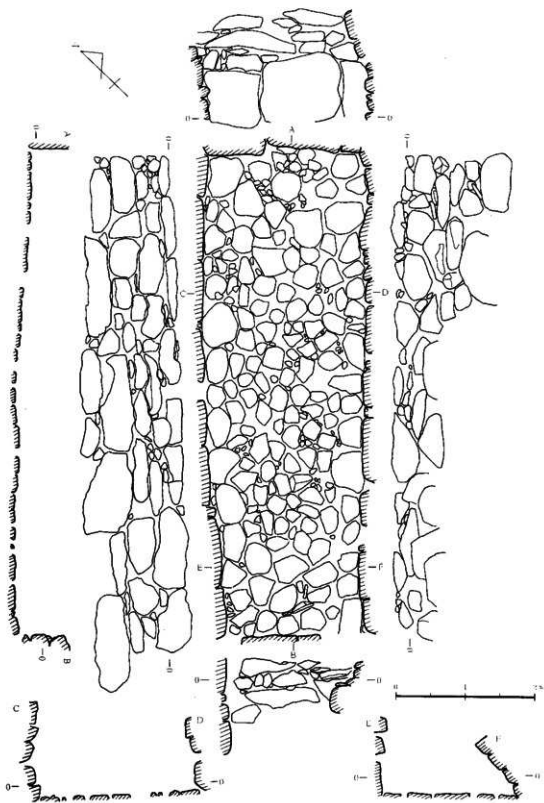
ついで、墳丘の現状実測を行ったが、結果は別に掲げた実測図(第2図)のように、平面形は完全な円形ではなく、南西方向に僅かながら出張っていて、楕円形とはいえないが、円を稍おし潰した形であつた。この平面形の形状については、当初からそのようであつたか否かは、墳丘の立上り、即ち墳丘の裾を明確にすることに依つてはつきりするものと期待した。このため、一つには墳丘の裾の限界である封土の立上り地点と封土の盛り上げ工程を検討するため、墳頂と考えられた地点を中心にして、墳丘傾斜面を切り下げた。調査前に検分した時、墳丘裾と考えられた周辺に小石が点々として連なっていたが、切り下げて見た結果は、墳丘斜面に葺かれていた石が落下したもので、墳丘を盛り上げる際の土留めと、墳丘を画するために配石した根廻りの石と考えられる大石はなく、僅かに子供の頭大以下の石がおいてあつたに過ぎない。これと同様に墳丘斜面に裾と考えられた所から高度2.8mの位置までに等距離間隔をもった四段の環状葺石が、封土に立てる如く葺き廻してあることが確認された。しかし墳頂に近い周縁には葺石列石がなく、この事は主体部の石室の完成後の土盛と関係があらうと推察された。

なお、墳丘外周の周溝の有無を見るために、墳丘斜面に設けたトレンチを外に向つて延長したが、その結果、墳丘裾から約80cm深さに落込みがあつたが、その幅については、土地の所有者が異なっていて、調査の承諾を得られなかつたため、確認は後日の調査に依るほかなかつた。

墳丘は以上のものであつて、子細に検討した結果、その径は20.5乃至21.5mとすることが妥当かと考えられた。高さについては現存で3.3mであつたが、原初に於いては更に50cm近く高まつたものと推考される。

第2節 石 室

石室は長軸が北43度東の方向をとり、玄門を南西に設けた羨道を有しない特異な石室である。



第3圖 石室 實測圖

即ち玄室（石塚）は床面で長さ7.2m、幅は奥壁に接するところで2.0m、中央で2.3mある。従って、石室の平面形は純然たる長方形ではなく、奥壁から約2mの辺できもち張るか、前壁に向うに従って幅を僅かに狭めていて、概して長方形プランとしてよいものである。

調査前の石室は、先きにも記したように、盗掘を試みた際であったが、天井石を採取するためであったかは明らかでないが、天井石の一部は取り除かれ、残存の天井石四枚のうち、奥壁直上の一枚は殆んど原位置と思われる位置にあったが、次の二枚は僅かながら動かされた形跡があって、当初の高さよりも幾分低位にずり下ったように看取された。

従って天井石を支えた直下の壁石の一部が崩落している場合は、石室内部の積土を排除して行くにつれ大きな危険が生ずるであろうことが考慮されたので、調査日誌にも記してあるように、天井石三枚及び西端にあった一枚、計四枚を一旦他に移して調査にかかった。

その予想の通り、石室内部には堆積土に交って、数多くの大石が落ち込んでいて、その落込み状態は根の長い牛蒡積みにしてあったものが一斉に崩れ落ちたように、面のある部分を下ににして、壁面に近く立てかけた如き状態にあって、それも東壁にのみであった。そのため、側壁実測図（第3図）に見るように、東側壁の基部を除いて上部には側壁の石積が殆んどなかった。

これに対して西側の側壁は、上辺の一部の崩れを除いては、可成原初のままの石積状態で残っていた。この両壁の崩落の違いは石積の用石に依るものであった。西側壁の用石は大きな割石で、小口を内にして横長に積み上げているのに対して、東側壁の用石は角の磨滅した河原石と思われるものを、やや無雑作に積み上げたもので、隣石どうしの接触部分が比較的少く、相持ちの力が欠けていたことに原因があったと考察された。一般に古墳の石室の壁石は割石或は塊石を様に積むのが通常であるが、本石室のように片面側壁を割石で積み、他の側壁を用石を異にして、河原石で積んだのは、蓋し特異のものといえる。その理由については知る由もないが、用石の欠如に依るものかとも想像されるところである。

奥壁は、内面幅1.15m、高さ1mの山石、幅0.7m、高さ0.8mのものなど三個の盤石を立て並べ、上に横長の割石を積み上げて奥壁を構成している。

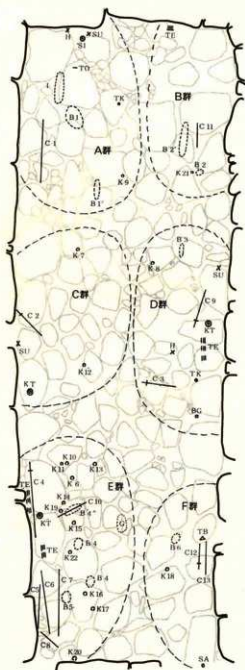
この石室は羨道のないことは既に記した通りであるが、玄門にあたる前壁は、側壁と同様に割石を以て積み上げているが、その積み様は素雑で而も簡単な積み方で、用石も比較的小ぶりである。一般の横穴式石室の羨門に行く閉塞のためにした如くである。ただし横穴式石室の羨道入口と異なる点は、その高さが段落ちせずして、石室側壁と同高のものであった。現状は盗掘の際にでもあろうか、前壁上部の石積は崩れていたが、北側の側壁がこの前壁と接する部分まで少しも高さを減ざることなく、同じ高さをもって積み上げて来ていて、特に前壁が高さを低めてあったとは考えられない状態であった。従って羨道のない横穴式石室ともいべきものであった。

石室の床面は敷石床となっていて、これに使用した用石は、多くは河原から採取したと思わ

れるもので、山石の割石とは違い、角のない面の滑らかなもので、大きなものは径50cm、小形のものでも径20cm前後のものであった。これ等を殆んど間隙のない状態に敷き詰め、僅かに生じた石と石との隙間には、小形の角礫を詰めて塞いでいた。

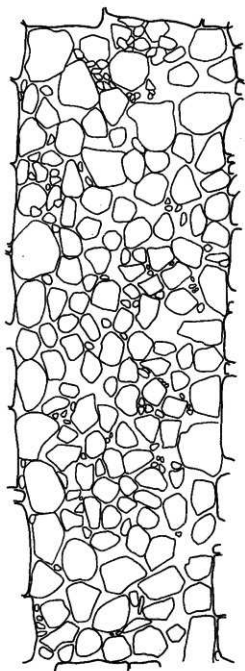
この敷石床面の下には、小角礫などを敷いて面を整えるといった工作のあととは認められなかったが、敷石上に別に工作のあとが認められた。即ち床面敷石とは別に、石室中軸線上に、床面に敷き詰めた石と同大か或はそれよりも小振りの割石を一枚あるいは二枚重とした列石が奥壁下から前壁（閉塞部）近くまで続いていて、更にこの列線に直交する別の列石が両側壁基部に達していた。これは奥壁線からほぼ2m毎にあって、二線目と前壁の間はやや距離があった。従って、石室内は中軸線の左右がそれぞれ三区分で、全体では六区分に間仕切りしてあった。





- B-----骨粉
 B2·B4·B5·B6は副鱗骨
 BG-----尾趾
 C-----武器
 G-----骨ヲス小丸
 H-----土加器
 I-----鐵金具
 K-----耳環
 KT-----骨
 SA-----土中瓦
 SI-----繩(L, D, C)
 SU-----土器器
 TB-----筒
 TE-----鉄鏃
 TK-----把頭
 TO-----刀

第4圖-1 遺物出土狀況圖



第4圖-2 床面敷石實測圖

第四章 出土遺物

第1節 遺物の出土状況

本古墳の出土遺物は、金環・ガラス小玉などの装身具、直刀・鉄鏃などの武器、轡・鉸具・鞍骨飾りなどの馬具、甕・壺・杯・坏蓋・平瓶・横袋などの須恵器、埴・坏・高坏・椀などの土師器があり、当地方の古墳出土遺物としては、種類・数量ともに豊かである。以上のほかに少なくとも5体以上の埋葬人骨が確認された。

遺物は、石室床面敷石直上を中心に出土したが、石室内崩落土の中よりも多数の遺物が検出され、また、墳丘自然堆積土中からも須恵器の破片が出土した。石室内に崩落している土の中から遺物が出土するのは、床面や墳丘出土の土器片と接合出来る土器片を含むことなどから、盗掘による擾乱があったことは確実とみてよい。しかし、それにもかかわらず、床面敷石上にはかなり良好な状態で遺物が遺存していた。

床面敷石上出土遺物は、副葬品のセットと目してよい遺物のまとまり具合から、石室中軸線を境に、奥壁寄り西側（A群）・同東側（B群）・中央部西側（C群）・同東側（D群）・玄門寄り西側（E群）・同東側（F群）の6群に分けることが出来る（4図）。ただし、土師器・須恵器の土器は、一部を除き飛散しており、埋葬時点の位置を推定出来るものは少ない。

〔A群〕

奥壁寄り西側に出土した遺物群で、その内容は、直刀1口・刀子1口・金銅内頭把頭・金銅鞍骨飾り・銀環1個・土師器埴1・同高坏3・同椀1・須恵器壺1があり、骨粉が2ヶ所に検出された。骨粒の位置から、遺骸は中軸線に沿って埋葬されたと考えられ、直刀は鋒を入口に向け、鞍骨飾りは直刀より奥壁寄りで、それぞれ遺骸の横に置かれており、供献用として特別に作られたと思われる土師器が、遺骸頭部近くの平石上よりまとまって出土した。

〔B群〕

奥壁寄り東側で出土し、僅かに直刀1口、金銅鞍骨飾り、金環1個、鉄鏃数本分のみの遺物群である。骨粉1ヶ所と骨粉化してはいるものの形を留める頭骸骨が検出され、特に金環はこの頭骸骨に付着していた。直刀は鋒を入口に向け、中軸線と平行に置かれていた。

〔C群〕

中央部西側に寄って出土し、直刀1口、鉄鏃数体分、轡1、耳環2個、平瓶より成る。

〔D群〕

中央部東側の遺物群で、直刀2口、把頭1、鉄鏃数本分、轡1、鉸具1、耳環1個、土師器杯1などが出土し、骨粉が1ヶ所発見された。側壁の崩壊が最も著しい箇所であり、崩れ落ちた側壁石のため、直刀が曲げられていた。直刀は1口が鋒を奥に向け中軸線を平行に、1口が中軸線と直角の向きで出土した。

[E 群]

玄門寄り西側に出土した最も数量の多い遺物群である。その内容は、直刀6口、鉄鏃多数、轡1、耳環11個及びガラス小玉18個で、骨粉が2ヶ所、頭骸骨2、臼歯の残る下顎骨も検出された。頭骸骨や骨粉の位置から、遺骸は中軸線と平行に置かれたらしく、直刀は5口が遺骸と側壁の間に遺骸に沿って置かれ、1口は骨粉直上より、遺骸の向きに交叉する形で出土した。鉄鏃は殆んどが直刀近く数ヶ所からまとめて出土し、轡も直刀脇より出土した。耳環は11個の多くを数えるが、取えてまとめると K〔6・10・11・13〕・〔14・15・13・22〕・〔16・17・20〕の3ヶ所になる。18個のガラス小玉はまとめて発見された。

[F 群]

玄門寄り東側で、直刀2口・把頭1・ツバ1・鉄鏃数本分・耳環1個・頭骸骨1が検出された。直刀は2口とも中軸線に平行に並べて置かれ、ツバも近くから出土したが、把頭だけは離れて閉塞石際から出土した。

土器片が床面や崩落土中や墳丘上に飛散して出土することは、盗掘による擾乱があったと考えられるが、それにもかかわらず、床面敷上には、骨粉に伴なって副葬品のセットとみてよい遺物が、かなり良好に遺存していたことは特筆に値いしよう。

第2節 遺物

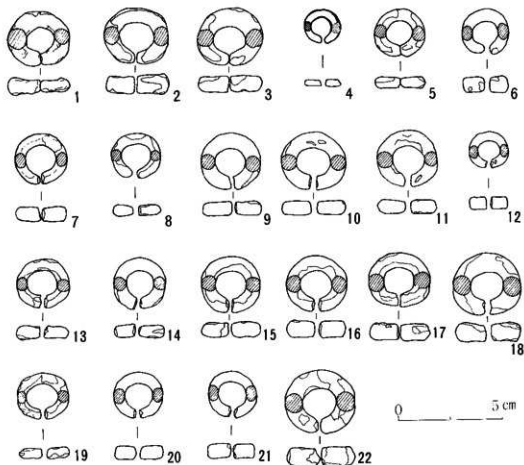
1. 装身具

本古墳出土の装身具には、耳環22個、ガラス小玉36個、丸玉片1個、白玉1個がある。

古墳から通常出土する勾玉、管玉は1点も出土せず、あるいは盗掘により盗り去られたのではないかと思われる。

A 耳環

耳環は22個の多きを数えるが、内訳は、金環16個、銀環2個、不明4個である。いずれも銅地に金張又は銀張したもので、一部を除き保存状態は悪い。形状は殆んどが正円形に近く、楕円形のものもある。断面は円形と楕円形が認められる。大きさは長径33.7cmから17.4cmを測る。



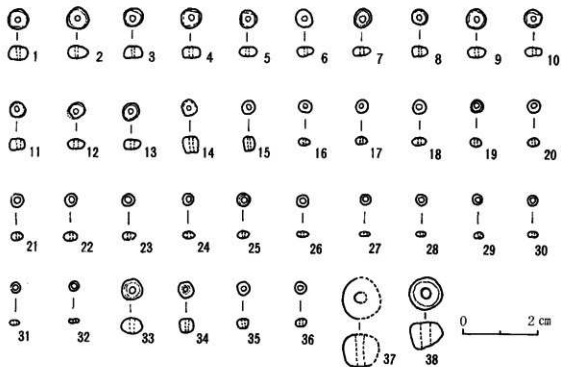
第5圖 裝身具(耳環・玉類) ①

出土耳環計測値表①

番号	鍍金	長 径	短 径	巾	厚 さ	形 状	断面形状	備 考
1	金	29.5	26.5	8.0	8.7	楕円形	ほぼ円形	
2	金	30.0	26.7	6.1	9.2	楕円形	長楕円形	
3	銀	30.6	27.1	7.1	10.2	楕円形	長楕円形	
4	?	17.4	16.2	3.2	3.9	ほぼ円形	ほぼ円形	
5	金	24.6	22.5	5.2	6.7	楕円形	楕円形	
6	銀	22.7	20.8	5.1	7.5	楕円形	楕円形	
7	金	26.3	24.0	6.1	7.6	楕円形	楕円形	
8	金	23.5	21.0	4.8	4.5	楕円形	円形	
9	金	28.6	26.8	6.6	6.7	ほぼ円形	円形	
10	?	31.0	27.3	6.8	6.7	楕円形	円形	
11	金	29.3	26.6	6.3	6.9	楕円形	ほぼ円形	

出土耳環計測値表② (21Pから続く)

番号	鍍金	長径	短径	巾	厚さ	形状	断面形状	備考
12	金	19.0	17.0	3.8	6.0	楕円形	長楕円形	
13	金	25.0	23.2	4.9	5.6	ほぼ円形	ほぼ円形	14と対
14	金	25.3	24.0	5.4	6.1	ほぼ円形	ほぼ円形	13と対
15	金	28.4	26.7	6.9	7.3	ほぼ円形	円形	
16	金	28.7	26.0	6.6	8.2	ほぼ円形	楕円形	
17	金	29.8	26.1	7.3	8.1	楕円形	楕円形	
18	?	33.1	29.9	9.2	8.6	ほぼ円形	円形	22と対
19	金	24.4	21.8	4.8	4.6	楕円形	円形	
20	金	23.4	21.7	5.0	6.9	ほぼ円形	楕円形	21と対
21	金	23.7	21.6	4.8	7.0	ほぼ円形	楕円形	20と対
22	?	33.7	30.1	8.7	9.2	ほぼ円形	円形	18と対



第5図 装身具(耳環・玉類) ②

B 玉 類

玉類は、ガラス小玉36顆、丸玉1顆、白玉1顆の出土があったのみで、通常出土する勾玉・管玉・切子玉などは全く出土しなかった。

ガラス小玉はほぼ2ヶ所より集中的に出土した。うち1ヶ所は出土遺物A群乃至B群の上層でいずれかに伴うものが攪乱により崩落土中に混入してしまったものと思われる。またいま1ヶ所は床面敷石上より出土し、B群に伴うものである。形状は孔の面が平らで胴の張った円筒形のもの、全体に丸味を帯びたもの、丸味を帯びた扁平なものがあり色調は、紺・青・薄青色のものがある。大きさは、径が6.2mmから3.0mm、厚さが5.6mmから2.3mmである。孔は全体的に平均して穿たれているが、一部不揃いもみられる。

丸玉37は不透明の薄い緑色を帯びた乳白色で、孔に沿って半分に割れた一方のみである。径10mm、孔径3mmを測る。

白玉38は、茶褐色稍膨張りの円筒形で、一方の面がかしいでいる。径9mm、孔部長さ7mm、孔径2mmを測り、孔は片側より穿たれている。

2. 武器及び武具類

古墳時代の武器には刺兵・刃兵・勾兵があって、武具の著しいものには馬具がある。また武装には兜・鎧がある。このうち武器である刺兵としては弓矢及び槍が主たるものであって、刃兵には太刀・刀子・劔があがる。これ等は同時代を通じて大いに用いられたが、勾兵である戈などは殆んど出土例を見ない。

本古墳からは刃兵である太刀が13口、刀子6口で、劔は皆無であった。刺兵は鐵が主なるもので、その数は多かったが既に破砕していて、不完全ながら形制の窺えるものが13本に過ぎなかった。鐵がある以上、弓の存在も考えられるが、木質であるため腐蝕したものであろうか。

武具の一つである馬具としては、轡が3箇、雲珠1箇（破片）、鞍橋の金具の一部と鞆3箇、鉦具1箇があった。鞍橋の礎の部分の金具と鞆があるのであるから、鞍も副葬されたであろうが、木質であったため腐蝕し去ったものと考えられる。

A 武器類

1. 刀 身

- (1) 奥壁から1米の地点を基尾にして、西側壁に平行して約20cm離れた位置から出土したもので、敷石面直上にあった。鋒及び茎を欠失しているが、現存の長さ70cm、身幅3cm、重ね0.6cmあって、平造り平棟である。噴出し鏝の一部が残っていた。
- (2) 奥壁から3.1m、茎を西側壁に接し、鋒を斜前方にしてあった。やはり床面敷石直上において。刀身は殆んど完全な形で出土した。平造り、平棟で、茎には木質が一部

付着し、茎尻に目釘穴を残している。全長51cm、刃部44cm、身幅2.5cm、重ね0.6cmで、鋒はふくらがある。噴出し鉤が残存していた。

- (13) 奥壁から約4mの地点、石室のほぼ中頃の東側壁から55cm離れたところを鋒とし、石室長軸に直交する如き状態に置かれていた。鋒の一部を欠失するほかは刀身は完形で、鎌及び鉤を伴っていた。両側で、茎尻は栗尻のようで、茎尻近くに目釘が付着していた。鋒の形は不明ながら、平造り平棟で、全長75cm、刃部66cm、身幅3cm、重ね0.35cmである。

- (14) 奥壁から4.75mの位置を茎尻とし、西壁にほぼ平行して、刃を外にし鋒を前方に向けた形で出土した。茎尻を僅かに欠失しているが、殆んど完形に近い。鉤を伴い、茎は片側で、茎尻の形は欠失しているため不明である。鋒はふくらがなく、切刃である。これに伴った鉤は倒卵形で、長径9.6cm、短径8.2cmの長大なものである。全長79cm、刃部72cm、身幅3cm、重ね0.6cmで、平造り平棟の直刃である。

- (15) 前壁である閉塞部に近い西側壁に沿うて、茎を奥にした状態で、三口の直刀身が置かれてあって、更に閉塞部寄りに鋒を斜め内にして一目があって、四口の直刀は相接していた。

その一目は茎が腐蝕しているが、全長55cm余、刃部44cm、身幅2.6cm、重ね0.6cm、平造り平棟で、鋒はふくらがあって、両は片側である。

- (16) 上記の5に沿うて、内側にあったもので、刃部を内にしてあった。茎を欠失しているが、現存の全長71.5cm、刃部66cm、身幅3cm、重ね0.7cmである。鉤は伴わなかった。

- (17) 上記6に沿うて、その内側にあったもので、刃部はかなり腐蝕が多く鋒の形状は不明であるが、茎は保存がよく、片側で、茎尻は一文字、茎尻近くに目釘穴一箇がある。平造り平棟である。

- (18) 西側壁に沿うて閉塞部に最も近い位置から出土したもので、刀子と見做されないこともないが、両側、茎尻に目釘が付着している。

全長24.7cm、身幅2cm、刃部が一部欠失している。

- (19) 東側壁に沿って、奥壁から2.9mの石室中頃の位置に、茎を奥にして出土した。勿論敷石床面直上にあった。この太刀は殆んど完形をしていて、腐蝕がない。鋒は明かに切刃と見ることができ、鎌もそのまま、柄縁と倒卵形の鉤が付着していた。両は両側で、茎尻は一文字、茎尻に目釘穴がある。この古墳から出土した刀身で、鋒が明かに切刃と断定できるのはこの一のみである。

全長73.6cm、刃部65cm、重ねは0.7cm、平造り平棟である。

- (10) 西側壁に近く、閉塞部から奥1.7m辺の位置の竹片直上にあつて、軸線に斜に交叉

する如く置かれていた。鋒及び茎の一部を欠失していて、全容を知ることはできないが、附近くの茎の一部が残っていて、片闕で喰出し鐔であったと思われる。全長（現存部）36.1cm、刃部32.5cm、身幅3cm、重ね0.7cm、平造り平棟である。

⑪ 奥壁の前方1m、東側壁から30cmのところに、茎を奥にして、刃を内に向けて、側壁に平行してあった。茎に木質が付着し、茎尻に目釘穴があって、目釘も残存していた。鍔もあったが、刃部の先が殆んど付蝕していた。現存の全長41cm、刃部34cm、身幅2.8cm、重ね0.8cmである。

⑫ 閉塞部から奥1.3m、東側壁から30cmの所に茎を奥にして、側壁に平行してあった。殆んど完形で、鋒はふくらがあり、両闕で、茎尻に目釘穴がある。鍔と倒卵形の鐔に縁も付蝕して残っていた。全長48cm、刃部41cm、身幅41cm、重ねは0.8cmであるが、この直刃は刀身に僅かに反りがある。

⑬ この太刀も⑫と並んであった。但しこれは茎を閉塞部に向け、刃を外にしてあった。両闕で、茎尻は一字である。全長40.1cm、刃部33cm、身幅2.8cm、重ねは薄い。この太刀は刀身に反りがあって、前記の⑫より著しいことが注目される。

以上が本古墳から出土した太刀の全部であるが、何れの太刀の附屬とも判明しない鐔が1箇ある。形は倒卵形で透しが6箇あるものである。

2. 刀袋具

これ等太刀は前記した如く、全部が刀身のみであったが、そのうちには、鐔の付着したもの、鍔のあるもの、目釘穴に目釘の付着したものがあり、茎には木質の付着したものなどあるよりすると、刀身のみ副葬したものではなく、拵のあるまま副葬したものであることは間違いないと考えられる。殊に本古墳からは、柄頭2個、柄闕1個、鞘尻2個が発見された。これ等は石室内に飛び散って所在したので、どの刀身のもので断定することは困難である。

柄頭の一つは、円頭式で、頭部は円弧を描き、底部に近く大きな鑿目孔を穿っている。銅製で、長さ4.7cm、底部の断面は倒卵形をなし、長径3.55cm、短径2.23cm、銅板の厚み0.8mmである。中に木質の残存があった。

他のものは平頭式で、先端の形は逆への字形をしていて、いわゆるへの字形のものである。銅製で、頭部下端から底部が漸次細まり、底部近くに鑿目孔があって、底に縁を設けている。底の断面は楕円形をなし、側面に隆状の突帯を二本おいている。

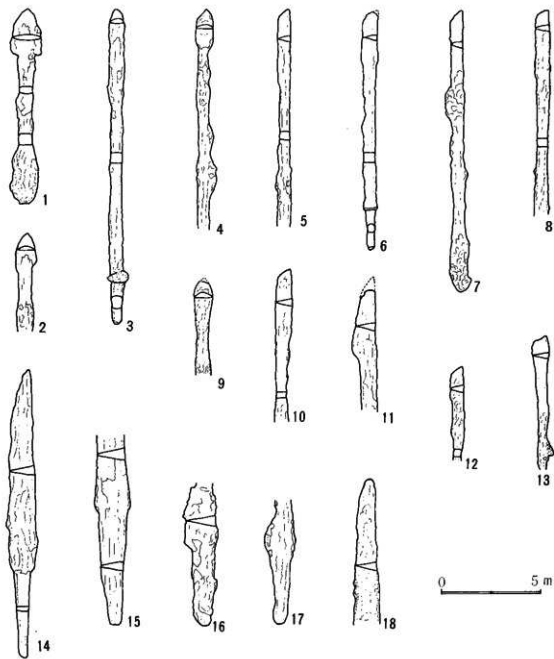
長さ5.7cm、底の長径3.3cm、銅板厚み0.25mm、中に木質柄の残部がある。

これ等の柄頭に伴うものであろうか、金銅張り鞍の鞘尻が2箇出土した。

鞘尻の一つは、銅板を弯曲させて下方で鎌合せたもので、内外側に渦文（追題文）を打込によって現し、全面に鍍金してある。内部には刀身を被覆した木質が鞘に残ってい

る。長さは7.8cm、断面楕円形で長径2.47cm、短径1.58cm、銅板の厚み0.9cmである。

他のものは同様金銅製で、長さ3.7cm、断面倒卵形で長径2.0cm、短径1.8cm、装飾はない。中に木質鞘が残り、一方は鋒の納まるようになっているが、他方は無孔で、その外を鞘尻の金銅板で止めている。



第7図 武器(2)鉄鍔・刀子

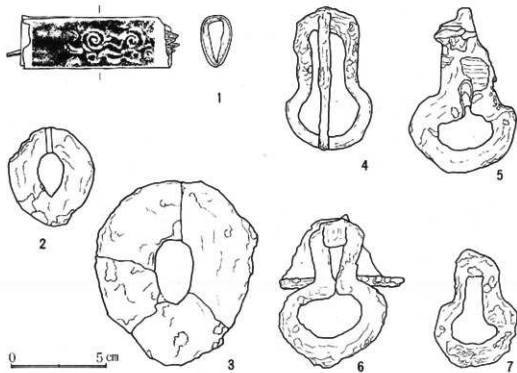
3. 刀 子

本古墳から出土した鉄製刀子は五口である。出土地点も石室内所々に及んでいる。刀子の殆んどは破砕した断片で、鋒・茎を欠失しているが、一口だけ完形に近いものがあった。その全長は14.6cm、刃部は10.2cm、身幅1.3cm、重ねが0.55cmである。鋒は伸び両関であって、茎の断面は矩形に近い。

4. 鉄 鏃

本古墳からは鉄鏃が数多く出土した。その出土地点は、四箇所で、その一点は奥壁中央前と、西壁中程の壁際と、閉塞部の奥1.5m辺の西側壁下及び同じく閉塞部から1m程奥の東側壁寄りで、奥壁下のものを除いては、何れも太刀の検出された脇或はそれに近い位置にあって、何れも数本づつ束になっていた如き状態で、而も皆壁面に平行していた。これから察するとき、東にして壁に平行して副葬したか、鞆に納めて副葬したものが、鞆が腐蝕し、矢の部分も腐蝕し去ったため、このような状態で鏃のみが残存したものであろう。

これ等の鉄鏃は破砕したものが多く、鋒部の判明するものは僅か13本程である。何れも長い莖被を有するもので、そのうち片刃箭式のもの7本、片丸造鑿箭式のもの4本、ほかに広鋒両丸造りのもの1本ある。何れも尖根式のものに属する。



第8図 武器(3)馬具①鞆尻・鏑・鉤具・鞆

B 馬具類

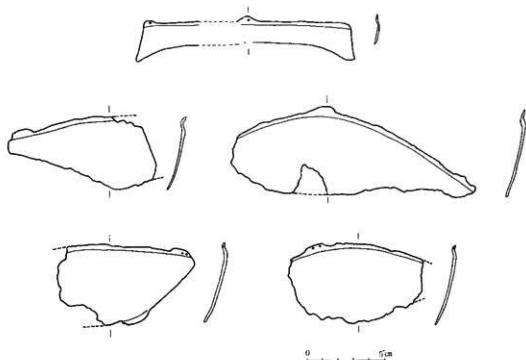
馬具は必ずしも武器とは見なし難く、ことに古墳時代の遺物としての馬具は、その多くは儀装的のものであったといわれている。従って、武器として取扱うことは適當ではない面が多いが、一面武器の一種と見なされ、武器の用を兼ねていたので、武器として取扱うこととした。

1. 鉄地金鋼鞍橋残欠

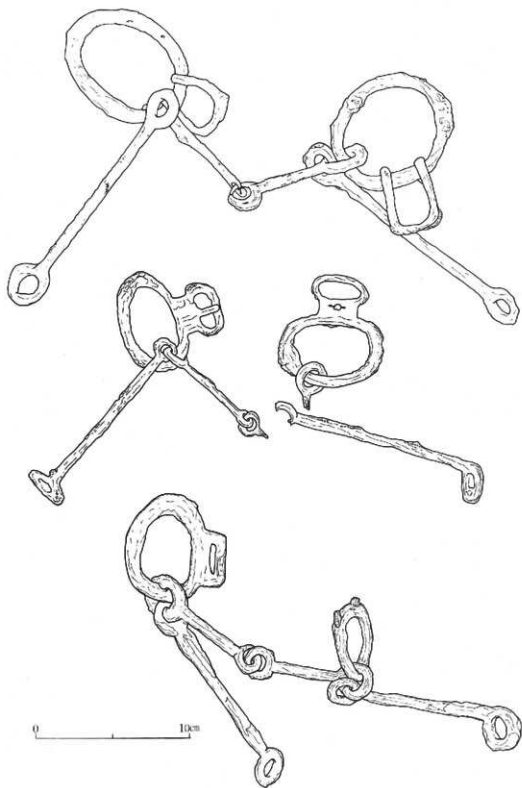
鞍橋の金具の残欠であるが、その縁の彎曲の形状とから察するに、前輪か後輪の何れかは判然しないが、鞍橋の磯の部分に飾った装飾金具として誤りなからうと思われる。石室の奥壁に近い西側壁寄りと、同じく東壁寄りの二箇所に分散してあったが、何れも床面敷石に接して検出された。ことに西壁寄りから発見されたものは、裏面に木質の腐蝕したものが付着していたから、鞍橋は丸木質で造り、これが磯の部分で装飾のため張り付けてあったものと察せられる。地金は鉄で金鋼張としたものである。

2. 鞍

鞍橋には必ず付属するものとして鞍(四方手)があるが、本古墳からは三個検出され



第9図 馬具(1)磯金具



第10圖 馬 具(2) 轡

た。鞆は胸繫・尻繫を鞆に止めるもので、鍔頭形の座金物に鞆・鞆受けの環の固着したものが普通のものであるが、この二個は何れも座金物はなかったようである。その一箇には、座金物の縁に当る鉄打ちの細い帯金具が付着しているが、座金物のあったところが見られない。

3. 轡

本古墳から轡3只が出上した。

一只是棒鉄のもので、鏡板は環状偏円形で、立間は遊鑿式で、矩形にしたものを折返し境板に引掛け、銜のくくみ及び引手壺を偏円形にした普通の形式である。

他のものも同様棒鉄で造り、その形制も大体同じであるが、立間が鏡板と共金で造り、鉸具のあるものである。

4. 鉸 具

鉸具は1個検出したが、比較的大形である。鞆の副葬があった以上、鉸や鉸具がもつとあってよいと思われたが、甚だ少なかった。

5. 杏 葉

杏葉は縁周に連続珠文を配したもので、その断片が一、二片であって、全体の形制を知ることは出来ない。

3. 土 器 類

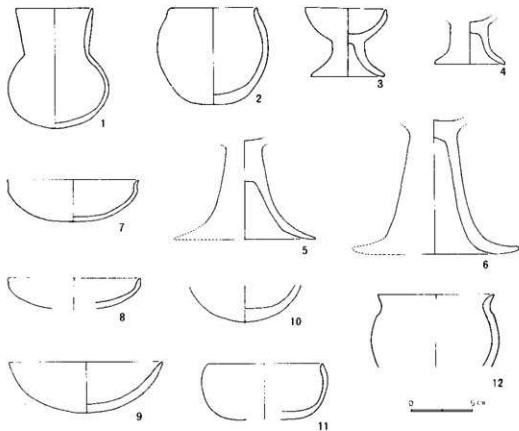
A 土 師 器 (第11図)

本古墳出土器類のうち、土師器と須恵器の比率は、後者が圧倒的に多く、前者は比較的に少なかった。

土師器の出土場所は、主として石室内部とくに玄室の奥壁に近い部分 (A群) に集中しており、ほかに玄室中央東側部分 (D群) に若干みられただけで、羨道部およびそれ以外の場所からの出土は全くといってよいほどなかった。

1. 埴 形 七 器

1はA群出土。高さ9.8cm、口縁径6.3cm、胴部最大径8.5cmを計るかなり薄手の土器である。器壁の外面全体と内面上半部に寛磨きが施されて、色潤赤褐色を呈す。外面の一部と内面下部にススが附着している。とほど欠損しているが、ほぼ完形に近い土器である。



第11図 土 師 器

2. 鐘形土器

2はA群から出土したもので、高さ8.0cm、口径7.5cm、胴部最大径9.2cmを計る。器壁外面を横位の磨きを施し、口辺部内外面を指頭によるナデ(?)が観察できる。また外面の一部にスガみられる。色調赤褐色を呈し、焼成良好。口辺部がわずかに欠損するが、ほぼ完形土器である。

3. 高杯形土器

いずれもA群出土。3は奥壁の向って左側部分から検出された小形土器で、脚部の一部がわずかに欠損するだけのほぼ完形土器である。杯部外面の口縁部は、磨きか指頭によるナデ整形が行なわれているが、下部には磨削り痕も観察できる。しかし全体的には横位の磨きが施されている。また杯部内面は、黒色研磨されている。脚部外面は縦位の磨き整形である。色調褐色を呈す。

4は1-6の石室内部から出土したもので、3と同様な小形土器である。杯部を欠損している。器壁の外面を磨き整形を施し、内面にスガが付着している。また、杯部は内面黒色研磨土器であったことがわかる。色調赤褐色を呈す。

5は1-8の玄室奥壁際から検出された高杯脚部である。3・4と比較してやや大形の土器。表面はかなり摩滅した感じを受け、色調は明褐色とでもいおうか、脚部内側の一部にスガが付着している。また、杯部は内面黒色土器である。

6は1-9の石室内部から出土の高杯脚部である。器面がかなり硬くしまった感じを受ける土器で、色調褐色を呈す。上部は縦位の磨きが施されているが、その下部は横位の磨き整形がなされている。

4. 杯形土器

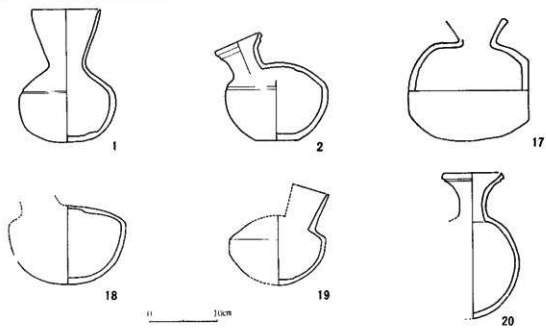
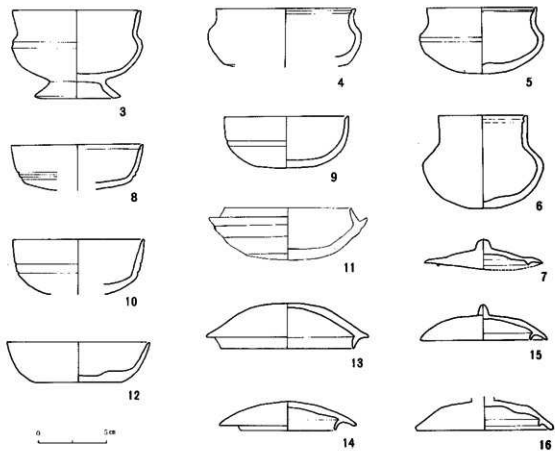
杯形土器の完形品は検出できなかったが、図上复原できるものに以下のものがわずかにみられる。7・8は口縁部内湾する器形を有するもので、外面に磨削り痕がみられる。

9・10は底部が丸底で、口縁部外反するもの。いずれも内面黒色研磨土器である。9は外面口縁部に横ナデ整形がみられる。10の底部器壁はかなり厚手に仕上げられている。いずれも色調褐色を呈す。

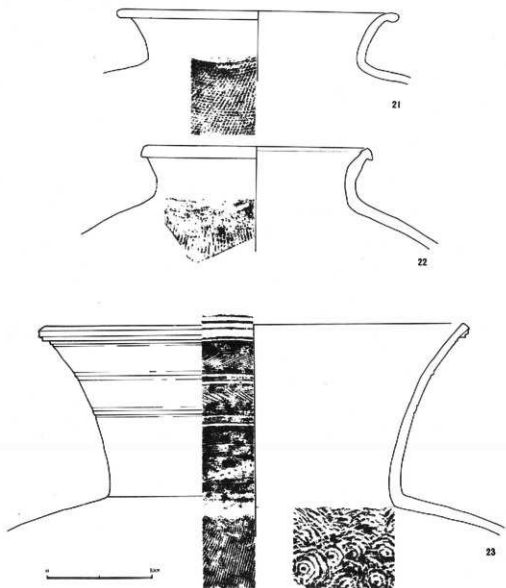
11は口縁部が内湾するもので、底部が不明である。内面黒色研磨、外面磨き整形痕が観察できる。色調褐色を呈す。

5. 甕形土器

12は小形甕形土器の胴部上半である。口縁部は「く」の字状に外反し、内面黒色研磨土器。器壁の外面は横磨きを施し、内面口辺部は横磨き整形である。色調褐色を呈す。



第12圖 須 惠 器 (1)



第13図 須恵器 (2)

B 須恵器 (第12図)

1. 壺形土器

全高の半ばより稍上に頸部のくびれがあり、そこから緩く開いて口縁部に至る。口縁は稍内弯する。胴部はほぼ球形の丸底で、肩部に1条の沈線が繞る。焼成は悪くもろい。全体に灰色。出土遺物A群に属す。

2. 平 瓶

ずんぐりした器形である。口縁は外反り内彎の嘴状を呈し、胴部は頂部に円孔を残し円板にて孔をふさいでから頸孔を穿ち口頸を取り付けている。平底で糸切痕が残る。器面は内面が灰色、外面は自然釉が全体にかかり緑白色を呈し、一部に自然釉の剝落がある。出土遺物C群に伴なう。

3. 台付 埴 形 土 器

口縁は緩く開き、口縁直下で一度くびれ、再び張り出し肩をつくり、底部に向っている。高台は高く、強く直線的に開いている。色調は黒灰色で、内外面とも所々に白い斑点が浮き出ている。良質な須恵器で、出土遺物D群に属する。

4. 埴 形 土 器

底部を欠くが、欠損部近くにヘラ削り痕が残る。口縁は外反りし内側に1条の沈線がある。肩が張りゆるい曲線を描き底部に向う。内外面ともに灰色で一部に3と同じ白い斑点が浮き出ている。焼成良好である。

5. 埴 形 土 器

器形は高台の有無を除くと3に酷似している。口縁部内側に1条、肩に2条の浅い沈線が繞る。底部は丸底でヘラ削りである。内面は黒色、外面は黒灰色を呈し、内外面とも一部に白い斑点がある。良好な焼成である。

6. 埴 形 土 器

口頸部は稍外反りし、口縁部内外に1条の沈線がある。体部は器高の半より稍上で最も張り、そのまま丸底の底部に向う。体部径に比し、口径が大きい、色調は全体に黒灰色ないし黒色で、黒色部分は艶があり白い斑点を浮き出している。胎土、焼成ともに良好である。

7. 環 蓋

乳頭状ツマミをもち、低い返しがある扁平な環蓋である。成形はあまり良くなく、焼成時点でゆがんでいる。内外面ともに灰色を呈すが、内面には一部白い斑点が浮き出ている。5の杯に伴なうものと考えられる。

8. 環 形 土 器

底部を欠くが、ヘラ削りの丸底と考えられ、緩く口縁に向って開く。口縁内側に1条、外面に2条の沈線が繞る。全体が薄い灰色を呈し、内面の一部に白い斑点が浮き出ている。

9. 環 形 土 器

へら削りの丸底でそのまま彎曲して口縁部に至る。口縁は稍内彎する。内面は灰色を、外面は黒灰色を呈す。

10. 環形土器

底部を欠くが、丸底と推定出来、緩く開いて口縁部をつくる。器高の半ばに稍深い2条の沈線を繞らしている。色調は全体に薄い灰色である。

※以上の3～10の環形土器及び不蓋は、器形、色調、胎土などにそれぞれ共通或いは酷似する点があり、同一窯で同一時期に焼いたものと考えられ、また、これらは飛散しており崩落土中に含まれるものが多く出土地点は不明瞭であるが、3が出土遺物D群に属することは明確であるので、4～10も同じくD群に属するものと思われる。

11. 環形土器

蓋環の身で、内湾外反りする口縁に強く張り出す蓋受けをもつ、丸底で右回りでヘラ削りしている。外面は灰色を呈し、内面は酸化焰により赤褐色に焼けている。床面より相当高い位置より出土したが、出土遺物D群に属するものと考えられる。

12. 環形土器

ヘラ起し平底で、調整してない。内面底部中央が丸く凹み、その周りは段を有し高くなり、器内も特に厚い。全体に灰色を呈す。焼成は良好でない。

13. 環蓋

ツマミをもたず、円頂部から緩い曲線を描き縁に至ると稍外反りする。反りは大きく若干内側に向うだけで、殆んど直下するに近い。内面は灰色を呈し、外面は濃い緑灰色の自然釉がかかっている。

14. 環蓋

12同様にツマミがなく、返しは稍小さく弱くなっている。頂部から同じ曲線で口縁部に至っている。内面から暗灰色、外面は黒灰色を呈し、外面には白い斑点が浮き出ており、4～9と同窯のものと考えられる。

15. 環蓋

内外面とも灰色で、乳頭状ツマミを有し、返しは小さい。

16. 環蓋

ツマミは剝落し痕跡のみ残る。成形良好でなく、内面の凹凸が著しい。返しは更に小さくなり、低い返しが申し訳程度に付いている。内外面ともに灰色。

17. 横瓮

比較的小型の横瓮で、体部の一方は丸く一方は平らで、中央より稍一方に偏して口頸を付す。回転する台に粘土円板を置き、積み上げ技法により頂部に円孔を残し成形し、胴部に頸孔を穿ち口頸を取り付け、その後円板で頂部の円孔をふきぎ、最後に米切りで台から離す方法を執ったと考えられる。内外面とも指頭によるなどで整形されており叩き目はない。色調は全体に灰色で、一部に自然釉がかかっている。

18. 平 瓶

2と同じ技法によって造られているが、口頸部を欠いている。底部は丸底で、ヘラ削りの後など整形している。色調は外面とも灰色を呈し、外面には自然釉による濃い緑色の部分が一部にある。

19. 平 瓶

全体にきりとした平瓶で、頸部から口縁部に向って若干開く口頸が、肩部に鋭い稜をもつ丸底の体部に取り付けられている。全体に灰白色を呈するが、肩の稜を境に上は細かな白い斑点が一面に浮き出ている。胎上・焼成とも良好である。

20. 横 盆

口頸部及び体部の一部であるから、全体の器形を判明することは出来ない。口頸は、頸部根本より外反りし、半ばから強く反り、内弯し嘴状を呈す口縁部に至る。体部は内外面ともなで整形されており、中央で径約14.5cmを測る。内面は灰白色、外面は灰白色の上に一部自然釉がかかっている。

21. 変形土器

口頸部のみで、頸部から強く外反りし外弯する口縁に至り、一方同じく強く張り出して肩に向っている。口頸部外面が黒灰色の外は全て灰色で、叩き整形されており、内面には青海波文がある。

22. 変形土器

21と同様口頸部のみである。頸部のくびれは弱く、緩やかに口縁部に、肩にと続く。口縁部は変形嘴状を呈し、内面に稜をもつ。口頸部外面は黒色を呈し、一部に白い斑点が浮き出しており、そのほかは灰色である。外面には斜格子の叩き目があり、内面には青海波文の叩き目がある。

23. 変形土器

広口の大型甕で、口頸部は頸部のくびれから外傾外反りし、複合口縁に至る。口縁直下に2条の文様帯があり、斜行叩き文が施されている。体部内外面とも叩き文がある。全体に青灰色を呈し、焼成はあまり良好でない。

上記の外に須恵器片の出土は多く、ダンボール箱3杯にもなる。そのうち、明らかに横盆と思われるものがあり、横盆は合計3個体になる。外に大型の変形の破片も叩き目により区別すると3～5個体のにぼる。

4. 人 骨

本古墳の石室内に於いては、いずれも骨粉化した人骨が、少なくとも5体以上確認された。

既に記した通り、盗掘の災に遇ったらしく攪乱されているので、床面レベルより高い位置で検出された骨粉が、果して追葬のものなのか、或いは床面に埋葬された遺骸が盗掘など後世の所為により原位置から動いたものなのか、確認する迄に至らなかった。

床面に確認された骨粉より、遺骸の位置、数・方向などを推定すると以下の如くである。

(イ) 出土遺物A群に伴うもの

奥壁に近く西側壁寄り。1体。方向は頭を奥に向け、頭部に祭祀に関わる上器を配置し、脚部右側に直刀を、上半身右側に鞍を置いたものと思われる。

(ロ) 出土遺物B群に伴うもの

奥壁に近く東側壁寄り。1体。耳環を付着した頭骸骨と骨粉があるが、頭骸骨の位置は移動したと思われる。頭を奥に向け、胴部又は脚部左側に直刀を置く。

(ハ) 出土遺物D群に伴うもの

石室中央部東側壁寄り。1体。向きは不明であるが、恐らく頭を奥に埋葬されたものと思われ、遺物は遺骸に沿って置かれている。

(ニ) 出土遺物E群に伴うもの

玄門近く西側壁寄り。1～2体。頭骸骨2と骨粉が認められた。頭骸骨をそのまま認めると2体となる。盗掘の痕跡の最も少ない場所であるが、隣りのF群出土の金環と対になる金環があるなど、無条件で原位置とすることは出来ない。けれども副葬品の数などから、2体並置あるいは頭を反対に向けて脚部を重ねる様な位置に埋葬されたと推定出来る。直刀・鉄鏃はまとめて西側壁際に置き、直刀1口は遺骸の上に遺骸の向きと交叉して置かれたらしい。

(ホ) 出土遺物F群に伴うもの

玄門近く東側壁寄り。1体。頭骸骨と骨粉を検出した。頭骸骨と骨粉の位置から、頭を奥に向け埋葬されたものと考えられるが、但しこの場合、頭骸骨から閉塞石迄約1.3mしかなく、子供の遺骸と考えなければ解釈出来ない。又直刀は鋒を北に向けることから、遺骸も足を奥に向けたと考えた方が無難なようでもある。遺骸に沿って直刀を配する。

上記の外、更に上層に於いても骨粉が数ヶ所で認められたが、床面敷石上の遺骸のみについて考えると、奥壁直前に第1次埋葬が行なわれ、その後順次入口に向かって追葬されたものであろう。

第五章 ま と め

塚穴原第一号墳は、調査の経過その他でも触れているように、天井石の一部が既に取去られて、崩壊の度が進んでいて、遂には全壊に至るであろうことがおそれられていた。このため全壊にいたらない前に内部構造以下を調査し、記録として保存し、幸に保存の可能のときは対応処置を行って保存する目的を以って調査に当たった。従って事前の準備は行ったものの、調査が始まると、石室の一部崩壊が意外に調査の進行を阻み、諸事困難もあったが、上田市教育委員会の全面的協力と下之郷地域の区長以下多数の人々の援助があつて、完全とはいえないまでも、調査の目的を果し得たことは幸であつた。

今ここに調査の結果を考察して、最後に推定を試みたいと思う。

1. 墳丘及び立地についての考察

本古墳は径21m前後、高さ現存で3.3m、原初は4m近いものであつて、塚田平では円墳としては最も大形の古墳である。その占地が、山裾にあるが、扇状地形の最上部にあることが注意されなければならない。前期式古墳はその占地を山上或は丘陵又は台地上を主にし、中期のものは平地に移り、それが後期に及んでも依然平地に占地するが、しかしそれ⁽¹⁾も耕地を避けるために勢い山麓或はそれに近い所が選ばれたとする説が行われている。大化二年の薄葬令にも丘墟不食之地に営むことを令しているのはこの意に解される。またその所に「葬は藏なり、人の見ることを得ざらしむことを欲すなり」とも記しているのは、前期或は中期の古墳が大権力者のためのもので、死後もその権力の象徴として丘陵上、台地上に墳墓を占めたが、後期に及ぶと、古墳築造者の地位も下降し、古墳の数も増し、古墳群をなすのであるが、併しそれにもかかわらず、その最有力者のものは最も勝れた所を占地したであろうことは、古墳群に於ける通例である。

この点からいうならば、塚穴原第一号古墳はその規模といい、地方豪族のうちの最たるものの墳墓であろう。

次にこの古墳には周溝が施されていたことが注意するべきであろう。一般に円墳には周溝の設けるものは少く、特に後期古墳には特別のものを除いてはないのが通常である。

またこの古墳には埴輪が伴っていなかった。墳丘にトレンチを入れた際にも、墳丘及び裾からもそれらしいものは皆無であつた。埴輪は、古墳時代中期を以て最盛期とされていて、その終末については諸説があり、大化改新の薄葬令にもそのことが見えないので、それ以前既に中央では廃絶したであろうといわれている。従つて7世紀前半頃には中央では行われなかつたことになる。本古墳にこの埴輪を用いなかつたことは、本古墳の築成年代を推定する一つの資料とならうかと考えられる。

2. 石室についての考察

本古墳の石室は割石を小口積にしているが、既に記したように、その玄室は長さが7.2m、幅が2.2m、高さが1.5mで、この地方では大石室である。用石も小割のものではなく、かなり大形の石を積んで壁を構築しているのは、多くの人力を役使し得たことが考えられ、副葬品中には金銅製太刀拵や圭頭柄頭、鉄地金銅製の鞍などのあったことと共にこの地方に於ける有力な豪族の墳墓であることが想像される。しかも、側壁の一面が、山の割石でなく、河原のかどのない大石を用いているのは、用石の割石が不足したためでもあろうが、谷間からこの用石を引き上げる人力は、山から引き下すのとは大きく相違した人力が必要なことは云うまでもないことであろう。この人力を駆使し得る人に限って為し得たとすることができよう。

次に問題は、本古墳の石室は天井に大磐石（五枚であろう）を用いているところ、横穴式石室築造の方式であるが、羨道がなく玄室のみで、前方の壁を閉塞部としている点が注目される。本古墳の下方にある他田塚古墳は、後期後葉に多く見られる極く短い羨道があるが、本古墳に全くそれが無い。善光寺平周縁の後期古墳の中には横穴式石室を有する古墳に交って、石室のみで羨道のないものが往々存在する。しかしこれ等は小形の石室を有するもので長さ2m前後、幅1m前後、高さ1m以下で、その構造は四方壁を板石でした箱式石棺のものが殆んどであって、本古墳とは性格を異にしている。

本古墳が、前期古墳はむろん、中期古墳に於いても行った堅穴式石室の遺風と見ることは、遺物のところでも記しており、後でも記すが、出土遺物が等しく後期古墳中葉以後のもののみであることから不可能である。更に研究を要する問題であろう。

次に、石室床面上の間仕切らしいものがあったことについても考えて見る必要があろう。

この間仕切が果して当初からのものかは問題であるが、床面の敷石に密接して設けてあったことは否めない事実である。これも遺物の項でもわかるように、間仕切と考えられる各区からの出土遺物がそれぞれまとまりがあること、それに必ず遺体が存在したことからも、最初からそうしたとは考え難いとしても、この古墳は年代を置いて追葬が行われたことは事実と認められようから、その際にそうした間仕切がなされたとしても可能ではなからうか。

石室内を間仕切してあった例の報告は寡聞にして充分に調査したわけではないが、^(注1)静岡県駿河湾地方に於いて、円墳・横穴の中に、石室内に複数の組合式箱形石棺を納めたものがあり、多いものは六棺もある。それ等の置き方も奥から中軸線の左右に二棺づつ、入口に向かって三通りにおいてあって、一棺のみのものは奥壁・側壁に寄せて一方を空地としたり、二棺のものは奥壁に接し二棺を並べ他の一棺はそれについて一方に片寄せて、その反対側を空所にしており、無棺ではあったが、奥壁を利用した床面平割のものもあるという。本古墳もこの床面平割式と見ることも可能で、各区に木棺を安置したと考えることもでき、

別項人骨の項と併せ考察するとき、更にこの推察に蓋然性を強めようかと思われる。

(考古学雑誌46巻1号 組合式箱形石棺の考察・小野真一)

3. 遺物についての考察

本古墳出土の副葬品には服飾品・武器武具(馬具を含む)土器などがあるが、その種類によって可成の偏頗がある。

服飾品では金銀環が22筒もあって、その数は甚だ多いが、古墳一般に出土する勾玉や管玉が1筒もなく、その破片をも検出することはできなかった。後期古墳に数多く出土する切子玉でさえ1筒もない変則なものであった。

武器は比較的多く、殊に太刀は特別多かった。大きさも区々で、鏑のあるもの、ないもの、噴出鏑のもの、窓のあるもの一枚などと様々であり、鋒も大部はふくらのあるもので、中には斬切先のもので1口あった。拵については全く知ることはできないが、その中に円頭柄頭、主頭柄頭各一つづつ、鞘尻は金鋼製のものがあって、被葬者の身分について、古墳築造の年代を推定する大きな要素となった。

鉄鍔も数の多い点で注意されたが、それによつて、注目されたのは、5、6本づつ束になった状態で検出された。恐らく束ねたか、鞘に納めて副葬したとする考えにその根拠を与えた。

馬具は鞍橋の磯に張った鉄地金鋼の金具が出土し、磯金具は左右別々に造り、磯の上辺には別の金属板を張つたろうと思われる薄金物も出土した。何れも縁に2~3mmの打出し帯状の縁がある。また前輪・後輪に付属した鞍(四緒手)と別に鉸具及び轡が出土したが、轡は鞍橋の勝れているのに対して、やや粗末で、ありふれたものであって、一致しない感がないでもない。

土器数は土師器もあるが、その大部分は須恵器である。須恵器は、坏が多く、蓋付もあるが、これには鈕のあるものとないものがあって、鈕は鱗形の突起がある程度である。他の須恵器は盥形のものも多く、平底もあるが大半は丸底である。この外に埴があり、瓶もあるが横袋が幾つもあって、須恵器は自然釉の被っているものが数の上では多い。土師器では高坏が殆んどで、脚の低く素朴なもので、脚が高く底部が広く張り出したものがあって、須恵器でも、土師器でも新古があるようであるが、共通していることは、供飲用のものが殆んどで、生活用の什器は甚だしいことであろう。

4. む す び

塚穴原第1号墳について、立地・形状・構造・副葬品等にわたって考察を行ったが、残る問題はこの古墳の地位である。即ち年代と性格である。立地・構造・副葬品等からいうなら

ば、古墳時代後期に属すると見ることは許されよう。即ち埴輪のないことがその理由の一つに挙げられよう。埴輪は中央では古墳時代後期中葉には廃絶していて、地方では以後も行われであろうが、七世紀中葉以後は終りを告げたと見られる。

次には馬具の出土である。馬具は六朝時代以後大いに発達し、その頃から馬具の副葬も行われたとする説が有力であるから、馬具出土の事実からは、七世紀を甚しく遡るものとは考え難い。

更に金銀環の出土、而もそれが石室の閉塞部に近く多く出土したことの事實は、先きに追葬のことを記したが、この追葬の箇所にも多いことと併せ考える必要があろう。その金環は後期古墳のうちでも後半期のものに多く出土する例からは、自ら年代も想定されよう。

殊にこの古墳から出土した板金製金銅装の鞘、それに伴ったものと考えられる圭頭式柄頭もまた、後期後半の古墳から多く出土する例からしても、古墳時代後期中葉以後とすることが穏当であろう。或は六世紀後半に位置させることもあながち無理とはいえない。但し、出土品の在り方からは、追葬を重ねたことは明らかで、その期間も少くとも四半世紀或は半世紀に及んだと見ることもできようと思われる。

その被葬者については不明という外ないが、その副葬品の中に金銅装の太刀装具があり、金銅装倉橋の残欠のあることなど、この地方の古墳出土の例のないものであるよりすれば、当時に於ける最も地位のある身分の人及びその家族のための古墳であったとすることは否めないであろう。

あ と が き

塚穴原第一号古墳は調査が進展するにつれて、その崩壊状況のひどさに関係者は心痛の思いにかられ、調査終了後の処置についてさまざまな討議をかわしたが、結論を下すのにかなりの時間を費やした。

というのは調査成果が口増しに上がり、古墳の重要性が確認されるにつれて終了後の単純埋めもどしでは東側の壁面は近い将来石室内へなだれこみ、石室としての形を失う恐れが充分あった。ましてや天井石の落ちこみの危険性はこれよりも一層強かった。

したがって、将来にわたる学術的活用はもちろんのこと、保存対策が早急に要求されていたのである。

こうしてとりあえずの対応策として調査団が考案したのが、原形とは若干異なるけれども、石室としての構造を保ち、天井石をのせ復元する方法として東壁面直前における補強用石積みであった。

これは学術的には若干の問題を残すとはいいながらも、現実時、早急な保存対策としてはやむを得ない処置だと思うので、関係各方面のご理解をいただきたいと考えている。

また、復元整備経た古墳は、天井石の抜去作業による結果と思われる墳頂部の土量不足により、復元後も墳頂部が削平されたような観を呈しているが、これについては今後土盛りにより保存してゆきたいと思う。

ともあれ、暦の上では春をすぎたとは言え小雪がちらつき、寒風が吹き抜ける廣さむい山のすそ野での発掘調査は、その内容からも決して安易なものではなかったにもかかわらず、多くの成果をあげることができたのは、調査員の先生方の熱意あるご努力と、地元下之郷自治会の皆さんの暖かいご協力の賜物と深甚の謝意を表する次第です。

1976年3月 上田市教育委員会





1. 墳丘全景(北側より)



2. 墳丘全景(西側より)



3. 墓石 (北側より)



4. 天井石直下



5. 内部堆積土



6. 西側側壁



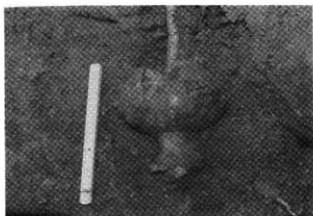
7. 石室內平剖狀況



9. 石室 前面から奥壁



9' 石室 奥から前面



10. 平瓶 西壁際



11. 長首壺 與壺際



12. 平瓶 西壁際



13. 刀剣と環 前方西壁際



14. 刀剣と環 中央西壁際



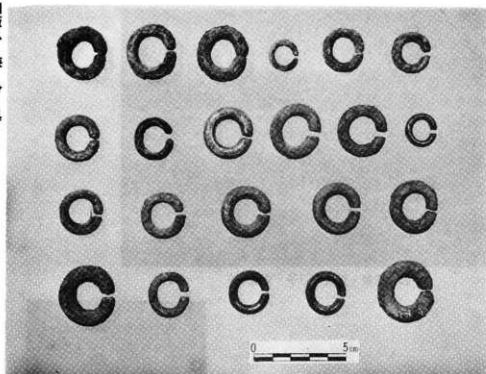
15. 刀剣・馬具・刀子 東壁中央



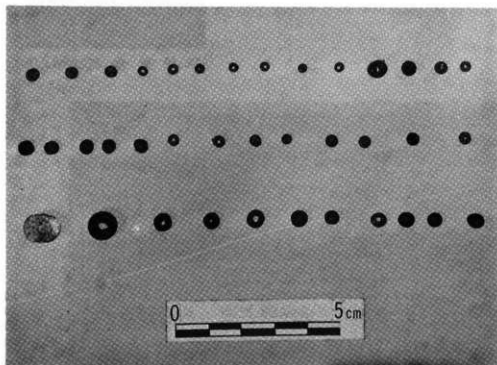
16. 頭蓋骨 前方西壁より



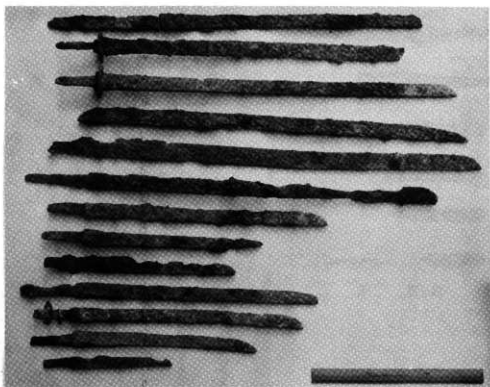
17. 刀剣・馬具 西壁中央



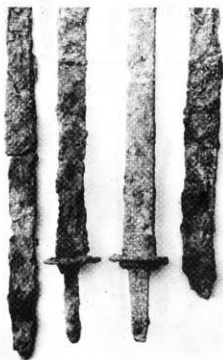
18. 環



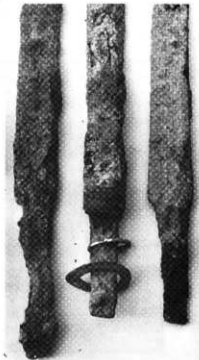
19. 小玉等



20. 刀 剣



21. 刀 剣〈部分〉



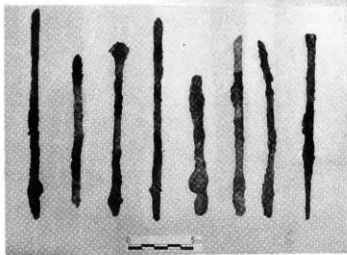
22. 刀 剣〈部分〉



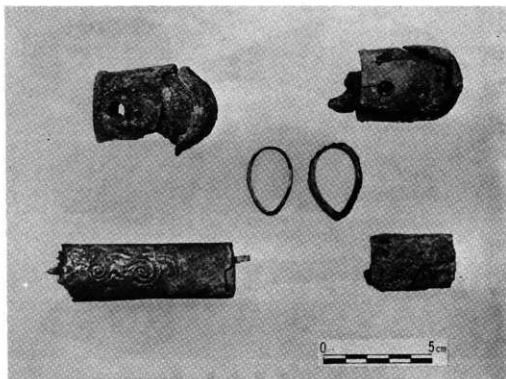
23. 刀 子



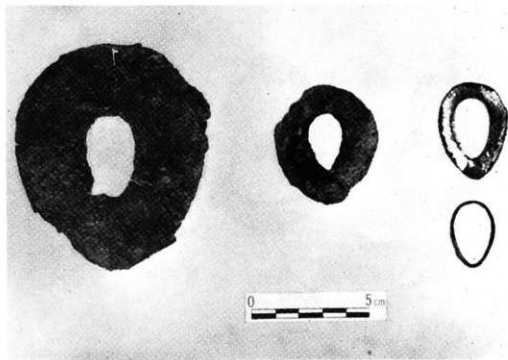
24. 鉄 鎌



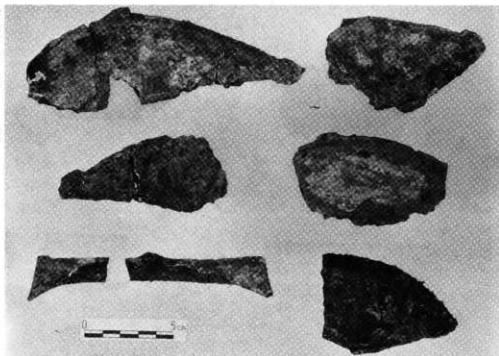
25. 鉄 鎌



26. 柄頭・鞘尻



27. 鐔



28. 鐵金具



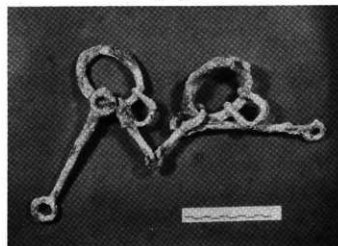
29. 鞅金具



30. 轡



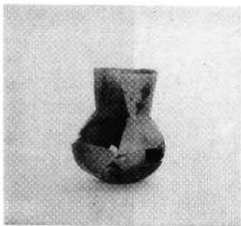
31. 轡



32. 轡



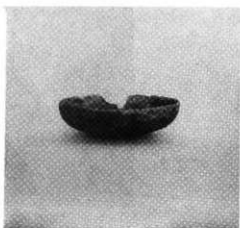
33. 盃



34. 罍



35. 高 杯



36. 杯



37. 高 杯



38. 高 杯



39. 高 杯



40. 罎



41. 台付罎



42. 長首・瓶



43. 平瓶



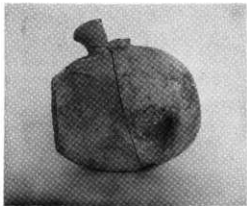
44. 杯



45. 平瓶



46. 平瓶



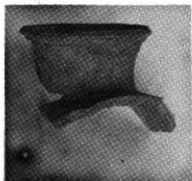
47. 横瓶(正面)



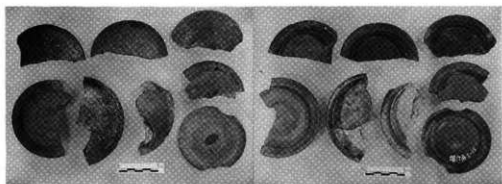
47' 横瓶(侧面)



48. 甕



49. 甕



50. 坏盖(表)

50'. 坏盖(裏)

上田市文化財調査報告書 9

塚穴原第1号古墳発掘調査報告書

1976年3月31日

編 集 行 上田市教育委員会
上田市大手1-11-16

印刷所 田 口 印刷機
上田市常田2-13-10